

術前化学療法（Bev.+mFOLFOX6）が奏効し 切除した進行大腸癌症例の検討

松本 大資¹⁾ 沖津 宏¹⁾ 藏本 俊輔¹⁾ 吉川 尊子¹⁾ 木原 歩美¹⁾
 松岡 裕¹⁾ 富林 敦司¹⁾ 湯浅 康弘¹⁾ 石倉 久嗣¹⁾
 木村 秀¹⁾ 阪田 章聖¹⁾ 組橋 由記²⁾ 沖津 奈都³⁾

- 1) 徳島赤十字病院 外科
 2) 徳島赤十字病院 薬剤部
 3) 田岡病院 外科

要旨

切除不能進行再発大腸癌に対するFOLFOX療法は標準治療である。さらに分子標的治療薬の導入により予後が改善している。今回、術前化学療法が奏効し切除した進行大腸癌5例を経験したので報告する。術前化学療法としてBevacizumab併用mFOLFOX6療法を4コース施行し、術前2コースは出血や創部離開の回避のためにBevacizumabを併用せずmFOLFOX6療法のみを行った。症例は50～70代の男女で、全てS状結腸から直腸（Rb）の下部大腸癌であり、化学療法前の臨床病期はⅡ期が2例、Ⅲa期が1例、Ⅳ期が2例であった。いずれの症例も化学療法により原発巣が縮小し根治性を得たため、手術を行い切除した。病理学的効果判定はGrade 1a～2であった。Bevacizumabの副作用が懸念されるが、自験例では手術における創傷治癒に関する合併症や出血は認めなかった。以上より、術前化学療法は、根治手術の困難な局所進行大腸癌の有効な治療法になると期待されるが、Bev.+FOLFOXは術前化学療法としては確立されていない。また安全性が確立した術前投与中止期間は定まっておらず、今後症例を重ね更なる検討が必要である。

キーワード：大腸癌、術前化学療法、FOLFOX

表1

はじめに

切除不能進行再発大腸癌に対するFOLFOX療法は標準治療である。さらに分子標的治療薬の導入により予後が改善している。今回、術前化学療法が奏効し切除した進行大腸癌5例を経験したので報告する。

方 法

術前化学療法としてBevacizumab併用mFOLFOX6療法を6コース施行した。ただし術前の2コースは出血や創部離開の回避のためにBevacizumabを併用せず、mFOLFOX6療法のみを行った。2週ごとの2日間の治療を1コースとして繰り返す（表1）。

5-FU bolus 400mg/m ²			
Day1	↓		Day2
Bev. 5mg/kg 90～30min	I-LV 175mg/m ² 2Hr	5-FU 2400～3000mg/m ² 46Hr	
	L-OHP 85mg/m ² 2Hr		

結 果

5症例を表2、3に示す。症例は50～70代の男女で、全てS状結腸から直腸（Rb）の下部大腸癌であった。化学療法前の臨床病期はⅡ期が2例、Ⅲa期が1例、Ⅳ期が2例であった。いずれの症例も化学療法により原発巣が縮小し局所根治性を得たため、手術を行い切

表2

年齢性別	部位	NAC 前 Stage	病理学的 Stage	病理組織学的治療効果判定	手術術式
症例① 50代 M	S 状結腸	SI(小腸, 膀胱), N0, M0 Stage II	SI (小腸, 膀胱), N0, M0 Stage II	Grade 1a	S 状結腸切除, D3 郭清
症例② 50代 F	直腸(Rs)	SE, N1, M0 Stage IIIa	SE, N0, M0 Stage II	Grade 1a	横行結腸人工肛門造設直腸高位前方切除, D3 郭清, 人工肛門閉鎖
症例③ 70代 F	直腸(Rb)	SE, N0, M1(肺) Stage IV	SS, N0, M1(肺) Stage IV	Grade 2	腹会陰式直腸切斷術 D2 郭清
症例④ 60代 M	S 状結腸	SI(小腸), N0, H0, M0 Stage II	SE, N1, H0, M0 Stage IIIa	Grade 1b	横行結腸人工肛門造設直腸高位前方切除, D3 郭清
症例⑤ 60代 F (多発癌)	S 状結腸 直腸(Rs)	SS, N1, H1(S6), M0 Stage IV SS, N0, M0 Stage IV	SS, N0, H1, P0, M0 Stage IV SS, N0, M0 Stage IV	Grade 1a Grade 2	腹腔鏡補助下直腸高位前方切除, D3 郭清, S 状結腸人工肛門造設

表3

症例	NAC 後(術後)の期間と現在の状況
①	術後2年9ヶ月。カペシタビンの内服を8コース施行。現在、外来で経過観察中で再発は認めず。
②	術後約2年5ヶ月。カペシタビンの内服を4コース施行後、人工肛門閉鎖術を施行。現在、外来で経過観察中であり再発は認めず。
③	近医にてmFOLFOX6を継続していたが、肺転移増大(PD)。本人の希望で休薬し、術後約11ヶ月で死亡した。
④	術後約20ヶ月。mFOLFOX6+Bev.を外来で継続中。CT上、明らかな再発無し。
⑤	術後Bev.+mFOLFOX6を12コース行った。新病変の出現を認めずRFA施行し、化学療法は休止して経過観察中。

に肛門縁より11cmに4型の腫瘍性病変を認め、内腔は狭窄しておりカメラは通過しなかった。術前化学療法後の図1-2では腫瘍の縮小を認めた。しかしながら全周性の狭窄は残存し狭窄部は硬化し蠕動は無く、ファイバーは通過しなかった。CTでは図2-1のように直腸上部からS状結腸下部に全周性の著明な壁肥厚を認めたが、図2-2のように腫瘍は著明に縮小し、central necrosisを伴ったリンパ節腫大も縮小した。摘出標本は図3で、瘢痕による狭窄を認めたが粘膜面の腫瘍は著明に縮小していた。病理組織学的には図4のように著明な線維化とアポトーシス、泡沫細胞を認め、組織学的治療効果判定はGrade 1a(腫瘍の1/3未満で癌細胞の変性、壞死がある)であった。

除した。病理学的効果判定はGrade 1a~2であった。術後の経過として、1例は肺転移の増大のために本人の希望で休薬し術後約11ヶ月で死亡したが、その他の症例は現在も外来で経過観察を行っている。

症例提示

症例提示1 (症例②)

50歳代、女性。直腸癌(Rs)cSE, N1, M0 Stage IIIaに対して横行結腸人工肛門を造設後、術前化学療法を施行した。CT評価で著明な縮小を認めたため、直腸高位前方切除術、D3郭清を施行した。病理組織学的にはpSE, N0, M0 Stage IIでありCapecitabineによる術後補助化学療法を行い、約5ヶ月後に人工肛門閉鎖術を施行した。大腸内視鏡検査では図1-1のよう

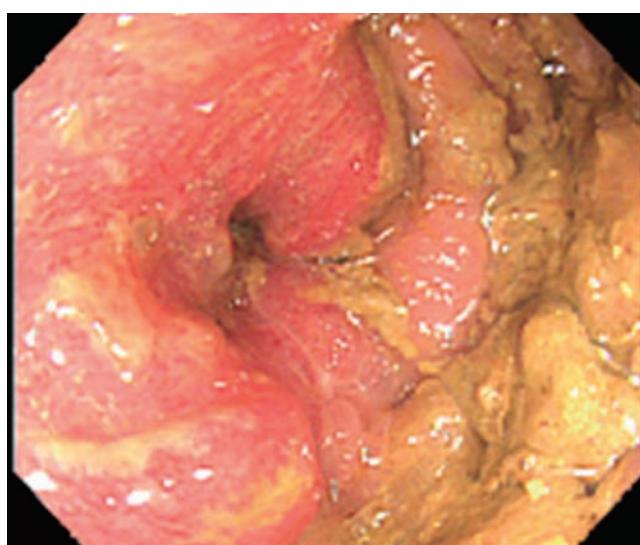


図1-1



図 1-2

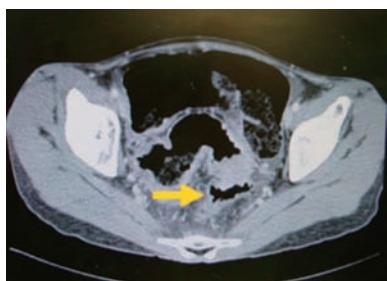


図 2-1



図 3

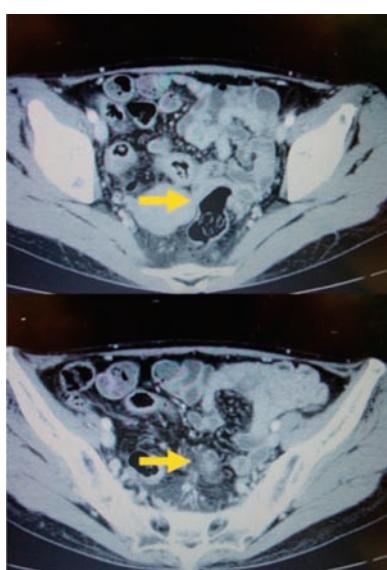


図 2-2

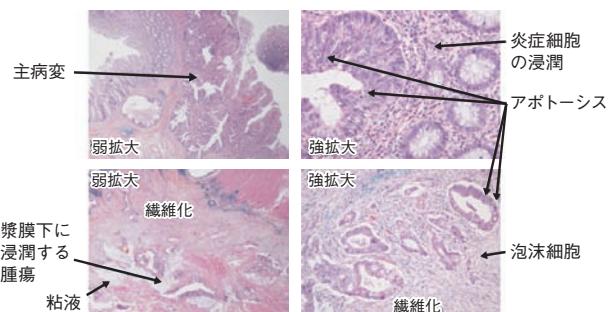


図 4

症例提示 2 (症例④)

60歳代、男性。S状結腸癌、SI(小腸)NOMO Stage IIに対して横行結腸人工肛門造設後、同様の化学療法を施行した。腫瘍の縮小を認めたため開腹直腸高位前方切除術を施行した。病理組織学的にはSE、N1、M0 pStage IIIaであり、現在も外来でBev.+mFOLFOX6による化学療法を継続中である。大腸内視鏡検査では図5-1に示すようにS状結腸に周堤を形成する病変を認め管腔は閉塞寸前であった。化学療法後には図5-2のように病変は縮小して平坦な潰瘍様となつた。CTは図6-1に示すようにS状結腸頂部付近に不整な壁肥厚を認め、腸間膜内に淡い石灰化を含む大きな腫瘍を形成していた。化学療法後には腫瘍はほぼ消失した。摘出標本は図7のようにS状結腸下部からRsにかけ腫瘍を認めた。粘膜面の腫瘍は縮小していた。病理組織学的には図8のように著明な線維化を認め、viableな腫瘍細胞は中分化腺癌の像を呈した。組織学的治療効果はGrade 1b(腫瘍の1/3以上2/3未満で癌細胞の変性、壊死、融解がある)であった。

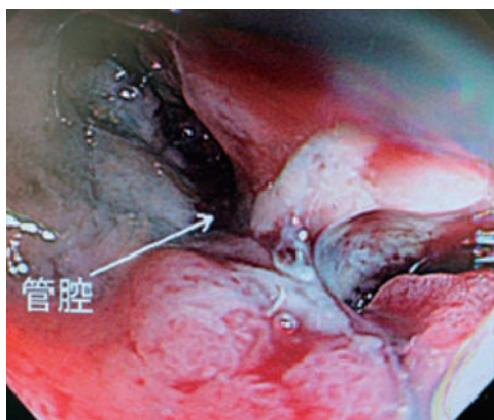


図 5-1

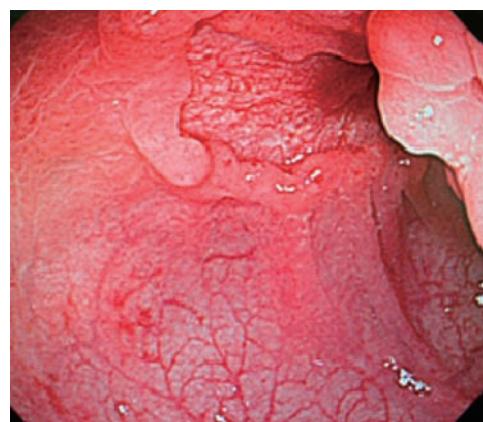
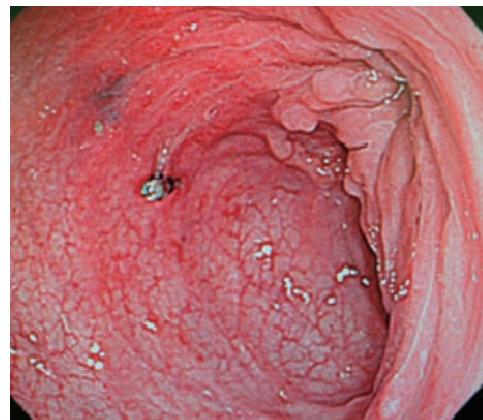


図 5-2

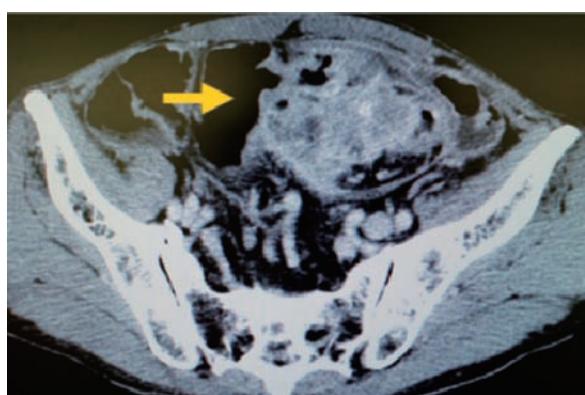
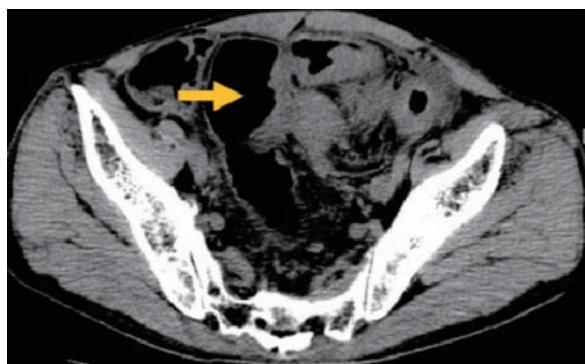


図 6-1

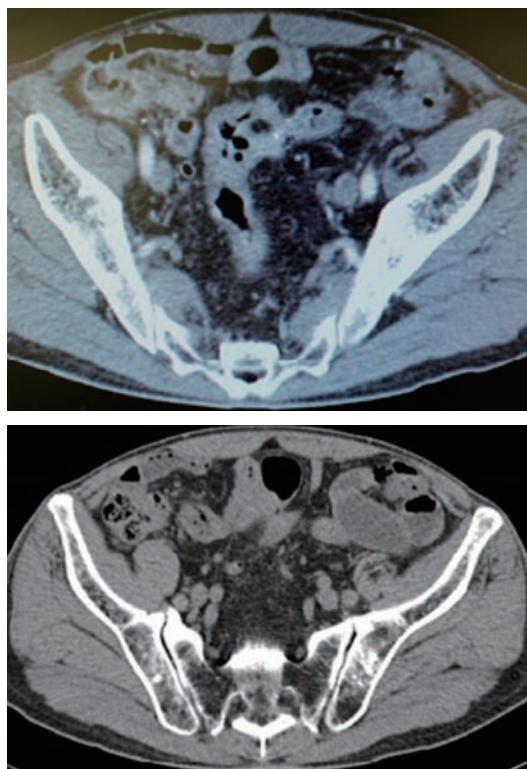
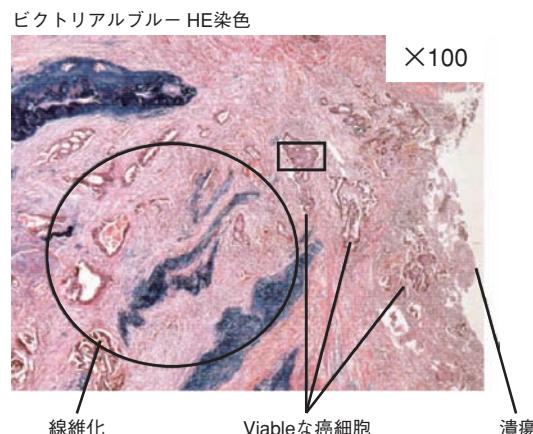


図 6-2



中分化腺癌

図 8

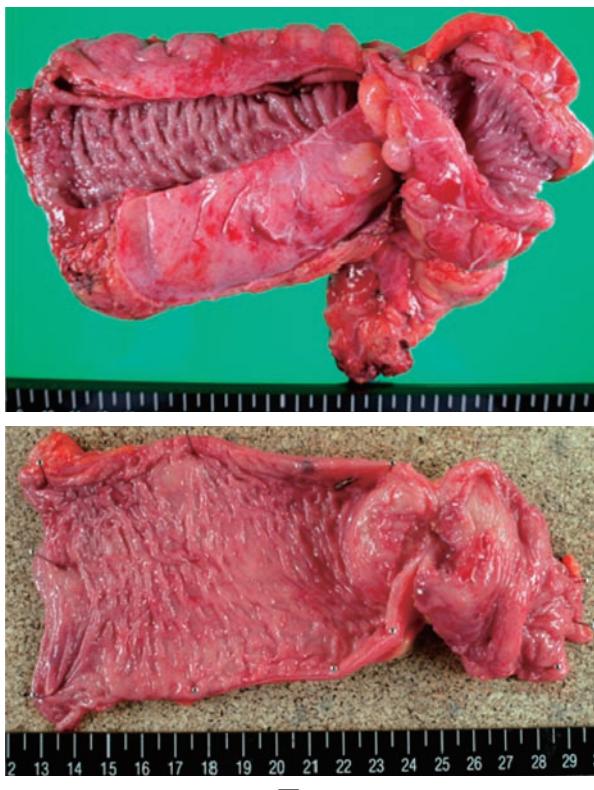


図 7

30 術前化学療法 (Bev.+mFOLFOX6) が奏効し切除した進行大腸癌症例の検討

考 察

Bevacizumab の副作用が懸念されるが、自験例では手術における創傷治癒に関する合併症や出血は認めなかった。また、これらの合併症の頻度を増加させない報告もある。

分子標的治療薬の導入で進行再発大腸癌の予後は改善しており、提示した症例のように一時的に人工肛門の造設後の術前化学療法は、根治手術の困難な局所進行大腸癌の有効な治療法になると期待される。

Bev.+FOLFOX は術前化学療法としては確立されていない。また安全性が確立した術前投与中止期間は定まっておらず、今後症例を重ね更なる検討が必要である。

文 献

- 1) 田口昌延, 宮倉安幸, 熊野秀俊, 他: 術前化学療法により組織学的完全奏効が得られた高度浸潤直

- 腸癌の1例. 日臨外会誌 71:2676-2681, 2010
- 2) 三宅祐一朗, 吉田陽一郎, 長谷川順一, 他:膀胱
浸潤を伴うS状結腸癌に対する術前FOLFOX療
法にて膀胱温存が可能であった1例. 日臨外会誌
71:1227-1231, 2010
- 3) 成井一隆, 池秀之, 窪田徹, 他:FOLFOX療
法後に根治切除した局所進行直腸癌の1例. 日本
大腸肛門病会誌 63:295-299, 2010
- 4) 矢ヶ部知美, 隅健次, 中房祐司, 他:mFOLFOX6
+Bevacizumab療法により腹腔鏡下intersphincteric
resectionが可能となった局所進行直腸癌の
1例. 日本大腸肛門病会誌 64:35-40, 2011
- 5) 須藤剛, 池田栄一, 高野成尚, 他:切除不能肝
転移を有する大腸癌症例に対しFOLFOX療法施
行後, 切除可能となった2例. 日本大腸肛門病会
誌 61:260-266, 2008
- 6) Brostjan C, Gebhardt K, Gruenberger B et al:
Neoadjuvant treatment of colorectal cancer with
bevacizumab: the perioperative angiogenic bal
ance is sensitive to systemic thrombospondin-1
levels. Clin Cancer Res 14:2065-2074, 2008
- 7) Matthew JE, Axel G:Curable metastatic col
orectal cancer:Curr Oncol Rep 13:168-176,
2011
- 8) YUAN Y, ZHOU B, WANG C et al:Effectiveness
of neoadjuvant chemotherapy for patient
with rectal cancer:A report of 16 cases. J
Abdom Surg (DOI:CNKI:SUN:FBWK.0.2009-
04-028), 2009
- 9) Gruenberger T, Gruenberger B, Scheithauer W:
Neoadjuvant therapy with bevacizumab. J Clin
Oncol 24:2592-2593, 2006

Cases of Advanced Colorectal Cancer Responding Well to Preoperative Chemotherapy (bevacizumab+mFOLFOX6) and Subsequently Resected Surgically

Daisuke MATSUMOTO¹⁾, Hiroshi OKITSU¹⁾, Shunsuke KURAMOTO¹⁾, Takako FURUKAWA¹⁾,
Ayumi KIHARA¹⁾, Yutaka MATSUOKA¹⁾, Atsushi TOMIBAYASHI¹⁾, Yasuhiro YUASA¹⁾,
Hisashi ISHIKURA¹⁾, Suguru KIMURA¹⁾, Akihiro SAKATA¹⁾, Yuki KUMIHASHI²⁾, Natsu OKITSU³⁾

1) Division of Surgery, Tokushima Red Cross Hospital

2) Division of Pharmacy, Tokushima Red Cross Hospital

3) Division of Surgery, Taoka Hospital

FOLFOX therapy is a standard therapy for unresectable advanced colorectal cancer. Following introduction of molecule-targeted drugs, the prognosis of patients with this type of cancer has been improving. We report five cases we recently encountered where advanced colorectal cancer responded well to preoperative chemotherapy, allowing surgical resection. As preoperative chemotherapy, four courses of mFOLFOX6 therapy combined with bevacizumab were administered. The two courses of this therapy immediately before surgery used only mFOLFOX6, without being combined with bevacizumab, to avoid bleeding and wound dehiscence. The patients were males and females in their 50s through 70s. In all patients, cancer affected the lower segment of large intestine (sigmoid colon to rectum (Rb)). The clinical stage before chemotherapy was II in two patients, IIIa in one patient and IV in two patients. Chemotherapy reduced the primary tumor in size to a level allowing radical treatment in all patients. So, the tumor was resected surgically in all patients. The resected tumor was pathologically rated as Grade 1a to 2. Although there are concerns over adverse reactions to bevacizumab, none of our cases developed any complication (related to healing of surgical wound) or bleeding. Preoperative chemotherapy is expected to provide an effective means of treating local advanced colorectal cancer for which radical surgery is difficult, but, combined bevacizumab+FOLFOX therapy has not yet been established as a preoperative chemotherapy. Furthermore, the safe period of suspending the preoperative treatment has not been established. Thus, further studies in additional cases are needed from now on.

Key words : colorectal cancer, preoperative chemotherapy, FOLFOX

Tokushima Red Cross Hospital Medical Journal 17:26–32, 2012
